渡熊谷直一先生の御懇切なる御指導の賜であります。謹んでこゝに厚く感謝の言を申し述べて擱筆いたします。

肥前相知附近の海蝕洞窟と石佛

原口九萬

唐津線相知驛の西方約一粁、相知炭坑々夫小屋の背後に露白する第三紀の厚層砂岩から成る丘陵地は斷崖を成し、その中腹には鵜殿窟がある。

小川博士によつて此の洞窟は海蝕洞と確認せられ、且その内壁や洞外に彫刻された磨崖の石佛は曾て西北九州に傳來した大陸交通記念物として、我國文化史上に興味ある遺跡であることが明瞭になつた。

この鵜殿窟の外に、相知附近には猶海蝕洞窟が現存するであらうとの考察の下に筆者は昨夏同博士の命をうけて、この地に訪れた。

此かる海蝕洞窟は舊汀線の位置を證示する貴重な記錄であつて、是等を追跡するときはそこに地學上興味ある事項を齎しうるものと信じたからである。隨て茲には主として海蝕洞窟に就て記述し從として石佛の觀察の結果を略記し、詳細は專門家の考證に讓りたいと惟ふ。

我國に於ける海蝕洞窟の研究中には其白眉と稱すべき山崎博士によつて發表された房總半島守谷の洞窟を始とし、江の島、紀伊半島其他各地ものの記載はあるが、未だ文獻は豐富とは謂ひ難い。

この意味に於て相知附近の海蝕洞窟群は珍重さるべきものであるが、探査の結果では、鵜殿の如き洞窟は數多くは現在せぬのである。加ふるにこの海蝕洞窟は含炭層と極めて緊密な關係を有するこの地方に特によく發達する砂岩中に

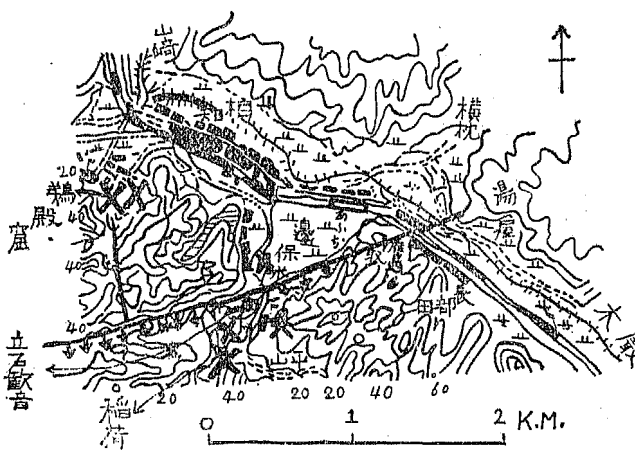
穿たれたものであつて、礦業の發展につれ業者の無慈悲な手によつて、既に毀滅したものが尠くない。

海蝕洞窟の特徴は通例アーチ形の洞口を有し天井は奥に入るに從て漸次低く且狹まり、底面はこの砂岩に發達する水平な節理面によつて造られ、水平である。洞内には何等の堆積物が殘されて居らず、守谷の洞窟に於けるやうな興味ある事實は發見されぬ。これは洞窟内に多くは石佛が造顯せられ、或は淫祠が祀られたため人爲的に取除かれたものとも想像される。而して是等の洞窟が古來住民の崇敬の對象物であつたことは、その原形をよく今日まで保存し來つたことに與つて力がある。又洞窟の内壁には明かに波痕を認めうるが、貝殻等の附着物はない。

猶この海蝕洞窟と誤認され易いものに、河川の浸蝕作用による洞穴や、風磨作用による洞穴或は砂岩中に發達する節理面に沿うて生じた洞穴或は採鑛の目的で掘られたものが諸處に存在するが、是等はその形狀及周圍の地形を注意さへすれば、海蝕洞窟とは容易に區別し得る。

以下筆者の觀察によつて海蝕洞窟と確認し得たもののみに就て、簡略に說明を附したいと思

第一圖



相知附近の地形と海蝕洞窟の位置

第二圖

鵜殿窟は相知炭坑前の坑夫小屋の後方に敷衍する低夷な丘陵地の斷崖の東斜面、溪底から約三〇米の高さにある。洞窟附近の丘陵地の比高は約五〇米あつて、平坦な頂部を持つ地形を表はしてゐる。丘陵は一層から或る厚いアルコース砂岩で構成されてゐる。この砂岩は岩屋砂岩と呼ばれ、相知層群の略中位を占める厚さ二二〇尺に達する特徴のある陸成層で、含岩層の上盤を成し、探鑛上には頗る重要視されてゐるものである。

鵜殿窟の高さの位置に大小の海蝕洞窟群が列に並んで居る態は第二圖に示した通りである。又その東方の丘陵地の西側斜面の斷崖にも同じ高さの位置に數多の洞窟群が現存し、小溪を距てゝ鵜殿側の洞窟群と相對してゐる。就中鵜殿窟は是等の内でその規模の最大なものであつて東方に洞口を開き間口十五間、奥行五間、高さ中

鵜殿窟は相知炭坑前に發達する第三紀の厚い砂岩から或る丘陵地の斷崖の中腹にある。寫眞は鵜殿窟は相知炭坑前の坑夫小屋の後方に敷衍する低夷な丘陵地の斷崖の東斜面、溪底から約三〇米の高さにある。洞窟附近の丘陵地の比高は約五〇米あつて、平坦な頂部を持つ地形を表はしてゐる。丘陵は一層から或る厚いアルコース砂岩で構成されてゐる。この砂岩は岩屋砂岩と呼ばれ、相知層群の略中位を占める厚さ二二〇尺に達する特徴のある陸成層で、含岩層の上盤を成し、探鑛上には頗る重要視されてゐるものである。

ふ。

（海蝕洞窟の位置は第一圖に於て×印で示した通りである）

鵜殿窟　鵜殿窟は相知炭坑前の坑夫小屋の後方に敷衍する低夷な丘陵地の斷崖の東斜面、溪底から約三〇米の高さにある。洞窟附近の丘陵地の比高は約五〇米あつて、平坦な頂部を持つ地形を表はしてゐる。丘陵は一層から或る厚いアルコース砂岩で構成されてゐる。この砂岩は岩屋砂岩と呼ばれ、相知層群の略中位を占める厚さ二二〇尺に達する特徴のある陸成層で、含岩層の上盤を成し、探鑛上には頗る重要視されてゐるものである。

鵜殿窟の高さの位置に大小の海蝕洞窟群が列に並んで居る態は第二圖に示した通りである。又その東方の丘陵地の西側斜面の斷崖にも同じ高さの位置に數多の洞窟群が現存し、小溪を距てゝ鵜殿側の洞窟群と相對してゐる。就中鵜殿窟は是等の内でその規模の最大なものであつて東方に洞口を開き間口十五間、奥行五間、高さ中

央部に於て三間に及び、アーチ形を成し、底面は洞窟の内部及外部ともに水平な平坦面である洞窟内及東方斜面には大小五十四箇の佛像が刻み込まれてゐる。

第三圖

丘陵地の東側斜面の斷崖には小さな佛像が多數彫刻されてゐる。寫眞はその一部分を示したもので左端の洞窟は小さい海蝕洞窟である。

第四圖　持國天

鵜殿窟にある持國天（身長六尺二寸、肩巾一尺九寸、顏長一尺二寸）である。右隅は鵜殿の洞窟の一部であつて波痕の殘れるを見る。

代表的なものは持國天、多聞天、釋迦坐像、衿羯、羅制多加兩童子、不動尊等であつて、その身長丈餘に及ぶものがあり、肉彫の表面は多少磨滅して居るもの丶朱や青や墨の着色は今猶明かに看ることが出來る。

小川博士によれば是等の石佛は希臘印度藝術の氣韻を横溢し、平安朝以後の密敎系統の佛像

第五圖　多聞天

多聞天(身長七尺二寸，肩巾二尺四寸顏長九寸，顏巾九寸)で持國天と共に最もよく原形を保存あるものであるその手法技巧表現に於て簡勁な線の太い力强い作風があり高古の氣韻が漲ひ，神祕的な重壓の感がある。

北九州の各地に現存することは、その請來の徑路を暗示するものであり、當時の東洋に於ける一大流行の造像の遺跡が我國に於ても發見されたことは愉快である。而して密教以前に傳來した鵜殿の石佛の如きはその規模に於ては龍門や雲崗や青龍山に比すべくもないが、盛唐の造像法の有終の美を我國に於て物語るものであると共に、奈良朝末期から平安朝初期の我國彫刻界に一生面を拓いたものである。

鵜殿窟の寺傳には僧空海の一夜の作と云ふ。それは信憑するには足らぬが、前述の代表的佛像はその簡勁は作風から見てそれに幾いものと想はれる。勿論それは樣式上の問題であつて確實なる文獻記錄によつたのではない。又鵜殿窟の石佛の製作年代も種々錯雜して居り遙かに後世のものもある。

とはその趣を異にし、その傳來の徑路も亦異なるものである。

この石佛の造像の手法は儀軌に偏した密教像に比すれば、何れも生硬稚拙で、生動の趣と豐輭の美を缺いでゐるやうであるが、その勁健簡朴な裡に高古の致が漾ひ、健陀羅笈多の藝風に影響されたところも多いものと想はれる。

盛唐末の流行的造像法である磨崖又は石窟中に興造された佛像が、遣唐使の碇泊港であつた

鵜殿窟は僧空海の開基後、僧常曉が天長年間宋から歸朝後、始めて此處に堂宇を建て鵜殿山平等寺と云ふ寺が出來た。以後この寺は岸岳城主松浦黨の崇敬敦かつたが、豊公名護屋滯陣中に當時の城主波多野三河守が領地を沒收せられ寺も兵燹に遇つて空しく灰燼と化し、現に只壁佛を遺すのみとなつた。

猶相知の南方數町、妙音寺境内には鵜殿窟から移した丈餘の一石佛が奉安せられ、又相知の熊野神社北麓の砂岩中には二佛像が開鑿されてゐる。

立石觀音　立石觀音は一に米の山觀世音と呼ばれ、相知郊外邊保木の西方三丁、溪流の絶壁の中腹にある。この丘陵を成す砂岩は岩屋砂岩よりも古いもので邊保木—鷹取斷層（第一圖參照）で岩屋砂岩と限られてゐる。洞窟の位置は溪底から十五米の高さにあり、洞口は間口十間奥行四間、高さ二間であつて、アーチ形を成し底面は平坦である。

洞窟の内壁には浮彫の三尊像が造顯せられ、中央に阿彌陀像、左右に十一面觀世音像と藥師如來像とがある。その表面は著しく磨滅して了つて昔日の面影を止むるに過ぎぬが、その位置から考察して藥師如來像は或は勢至像であるかも知れぬ。造像の手法と技巧から推して相當古いものと想はれる。洞内には波痕が殘されてゐる。

稻荷神社　稻荷神社は平山下の炭坑から西方二町、佐里に通ずる街道の北側にある丘陵地の中腹に穿たれた海蝕洞窟内に祀られてゐる。この洞窟の大さは間口五間、奥行二間高さ四間であつて、南方に洞口を開き、道路面から約二〇米の高さにある。又街道を距てゝ南方の丘陵地にも海蝕洞窟群が望見される。

以上は筆者の觀察したところの海蝕洞窟であつて、是等の位置から舊汀線を論ずるは早計の譏を免れぬ。此の問題を取扱ふにあたつて次のやうな困難な事實が伏在する。先づ第一に相知附近は現在の海岸から遠く距たり、松浦潟から約十二粁も奥地にある。第二に地形を見るに、

岸岳や日河内山は城壁のやうな山貌を成し、頂上は低平であり、又鵜殿窟附近も亦平坦な丘陵地であるが、是等は風化浸蝕兩作用に抗する力の大な砂岩であり、その抵抗力の弱い部分の地形のかく單純でない事から考へて、比較的新しい時期の隆起面とは想定し難い。第三に海蝕洞窟の生成した地盤運動の性質は全く知りうる手掛がない。第四に該地方は唐津炭田の中樞地であつて、礦業の發展のため地形は著しく破壞されて居る。

故に以上の事項を考慮して唯海蝕洞窟の現存する事實から推知しうることのみを陳べて結語としたい。

海蝕洞窟の溪底からの比高は既述の三者とも異つてゐるが、同一時期に生成したものであるか否かは地盤運動の性質が明かでない以上茲に斷定し難い。

海蝕洞窟の底面が綜べて水平の位置にあることは少くともその生成後に地盤運動の皆無であつた證據であつて、第一圖に示した平山下—鷹取斷層も海蝕洞窟の生成よりは古いものである

花崗岩類から成る脊振山塊の西緣は著しい斷層谷であり、相知附近の低地にまで現に伊萬里附近に見るやうな深い灣入が、北方の松浦潟から連つて居り、現存する海蝕洞窟群はその當時の汀線の位置を暗示するものではなからうか。

又大築學士の平戸圖幅說明書によれば鷹島及岸岳には波痕が記載せられ、佐世保附近の海岸にも俗に眼鏡岩（風磨作用によつて生成されたと云ふ）と稱する洞穴が存在する。筆者は是等を實見し能はなかつたが、相知附近の海蝕洞窟とは勿論生成の時期は異なるものであらう。

猶嚴木驛西南二粁强、波瀨と云ふ地名は注意すべきものであるが、その附近では海蝕洞窟を發見するに至らなかつた。

（昭和五年十二月六日稿）